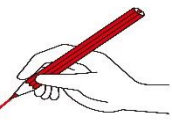


Move Mountains

5年生通信

4月22日10号



○確定と推測

国語の授業では、答えのある問いと、答えのない問いがあります。

答えがなくとも、本文の言葉を根拠に推測できることはあります。

「教科書に載っていることが根拠で、絶対でしょ。推測するのはおかしい。」と意見がありました。

解説します。

現在扱っている「銀色の裏地」を例にします。

最初に設定の確認をします。

登場人物これは**確定**できます。

中心人物も対人物も**確定**できます。

しかし、「時」がいつなのかは**推測**するしかありません。何月何日とは書いてありません。ヒントは最初の言葉にあります。

「クラス替えの日」と書いてあります。日本の学校でクラス替えがあるのはよほどの例外を除いて4月の始業式の日でしょう。だから、4月の物語であるといえるわけです。

明確に「始業式の日」とは書いてありません。しかし、根拠に基づいた説得力のある推測ですよ。

さて、これを他の生活場面で考えてみましょう。

今年の夏は、どのくらいの気温になると思いますか？

と聞かれたらどのように考えるでしょうか。

「暑い」は、感覚ですね。もう少し具体的にしましょう。

「30℃くらいだろう」と推論することはできます。それは、経験から考えることができます。

さらに確度を上げるとしたら、過去のデータを参照するわけです。ちなみに過去30年のデータを見ると8月の名古屋市における平均気温は32℃だそうです。

これが**根拠**ですよ。

『おそらく32℃くらいまで上がると思います。なぜなら、過去30年のデータ蓄積があり、平均気温を見ると32℃になっているからです。』

根拠を基に推論するというのは、こういうことです。

「まだ未来のことは分からない」けれど、過去のデータという根拠をもって推論することはできるわけです。

「文章中に直接は書かれていない」けれど、言葉を基に推論することはできるわけです。

これを問題提起してくれた子は、非常に言葉にこだわっていることがよく分かります。私は、そういう姿勢に感心します。学問の道を歩んでいる感じがしますね。

厳密に言葉にこだわるの、私も大好きです。

ちなみに、5年生では**直接書いていないけれど**、心情を表現していると思われる描写について学びます。とてもいい発言でした。